

房山雲居寺について

一九八四年十一月二十三日及び一九八五年四月二十六日の二回に分けて房山雲居寺の調査研究を行ない、房山雲居寺の現況調査及び所蔵されている石経の調査を行なった。又、一九八四年十一月二十日には、雲居寺石経と関係が深いとされる契丹版が発見された山西省応県の本塔を調査する機会を得た。更に一九八五年の房山研究旅行の後、北京に於いて中国仏教協会の協力により、房山石経中の新発見散失經典である「梵本般若心経」「釈教最上乘秘密陀羅尼集」「一切菩薩名集」の四本（梵本般若心経は異訳二本）を写真撮影することができた。これ等の新発見經典に関しては、現在整理中であり、発表を後の機会に譲ることとし、ここでは、房山、及びその石刻の歴史と現状について報告したい。

言うまでもなく石刻の歴史は、反仏教政策を執る王朝の仏教排斥から仏典を守るために行なわれた。「鼓山唐邕刻経銘」に

縑緇有壞、簡策非久、金牒難求、皮紙易滅

石 橋 成 康

と述べられるように、紙などに書かれた經典は壊れやすいが、石経は永く保存できるとしている。又房山石経の発願者である静琬の師匠であった南岳慧思が

慮東土藏教有毀滅時、發愿刻石藏、悶封岩壑中。

と述べるように、「法難」に際しても、石に經典を刻んでおけば後世に仏典を伝えることができると考えた。

このような事情から造られた石経は房山石経だけにとどまらず、河北省武安県の響堂山石経や、四川省安岳県の安岳石経などがある。特に、規模に於いて房山石経に劣るが、安岳石経はまだ研究の手がのびておらず、これからの研究が待たれる。現在、中国に現存する刻石石経には、有名なものとして泰山の「金剛石経」や、山西省風峪の「華嚴経」などをあげることができよう。しかし、これ等の石刻には製作年号がなく、いつ製作されたものかわからない。これに對して、房山石経や、河南省武安県の「響堂山石経」、「安岳石経」などは年号も残されており、又、その規模に於いても、泰山のも

のなどにくらべて非常に大きい。響堂山石経は、北斉の天統四年（五六八）から武平三年（五七二）にかけて製作された事が常盤氏の「中国仏教史跡踏査記」で明らかにされている。

又、まだ外国人研究者が入っておらず確実な研究成果がでていないが、中国側の発表によれば、「安岳石経」は唐の開元年間（七一三～七四一）に刻石されたことが、明らかにになっている。これ等の石刻に対して、房山石刻は、静琬の発願（貞観十三年六三九年）以来、唐刻を経て、遼代の契丹版を底本とする遼刻、金刻、元刻の、唐代から元に至る、約七百年以上に亘る長い歴史を持っており、質、量共に他の石刻を上まっている。又、解放以後、^{〔3〕}応県の木塔から発見された僅か四七部を残すのみである契丹版大蔵経を底本として刻石された房山石経は、契丹版大蔵経の姿を探るうえで、貴重な資料となるであろう。

これ等房山石経が保存されている、房山雲居寺の現況は、日本軍の爆撃によるとされる破壊によって、昔日の大伽藍を想像することもできない。房山雲居寺の現状については、別表に示した如くである。昔日の房山雲居寺の様子や、その歴史の変遷については、塚本氏等の房山調査研究の成果である「房山雲居寺研究」に詳しいが、ここでは「房山雲居寺研究」や、その他の房山関係資料にみられる重要な仏教関係資料が、現在どれほど保管されているかについて述べてみた

房山雲居寺について（石橋）

い。

清代以前に於いては、本来雲居寺と供に東峪寺が在り、雲居寺自体も西峪寺と呼ばれていたことが、諸資料より明らかである。

東峪、西峪両寺、石経洞之左右翼也。（燕都遊覧志）

現在、この東峪寺を見ることはできないが、「房山雲居寺研究」によれば、当時東峪寺を含めた房山関係の碑文が百二碑あったとされている。その内、石経洞第六の前にあったとされる五碑の内、元刻の「重修華嚴堂經本記」は、現在失われて見ることができない。しかし「帝京景物略」を見ると、往時は十一碑在ったと記しており、塚本氏が滞在した昭和十年当時には、すでに六碑欠けていたようである。又、明代に著された「雙崖集」（周忱）には、「左右見有碑十余……」と述べるように、更に多い碑文が有ったと思われる。ただ、「重修華嚴堂經本記」は「房山雲居寺研究」にその拓本が載せられており、その内容を知ることができる。

以上述べた雲居寺石経洞に対して、雲居寺自体には、常盤氏が「……堂々たる大伽藍である。大殿が毘廬、釈迦、薬師、弥陀、大悲菩薩を中心とする五重となつて、南北に二大宝塔があり、南のは厭経塔とせられ、北のは紅塔といはる。これに付属した建物や小塔や、経幢、仏幢が幾つもあり、……」と述べる記述や、「房山雲居寺研究」に付されて

いる「西域寺塔圖」からは、想像もつかないほど、破壊されている。少なくとも現在、雲居寺において見ることができるのは、常盤氏が「紅塔」と呼んでいる「北塔」と、北塔を中心とする保管庫に残された石碑や梵鐘、その他「三公墓」と呼ばれる墳墓のみである。昔日には百を数えたと言われる石碑も今は僅かに保管庫に唐碑一、遼碑一、元碑三、明碑一、清碑二を残すばかりである。その他唐開元十年の銘がある仏幢が四基、遼代製造の石塔が四基残されている。この中には「金石文字記」などに記載される有名な「雲居寺石浮屠銘（開元十年）」は無い。燕都遊覧志によれば、

寺門右石浮屠銘、大原王大悅撰并書、立於開元十五年二月。

と述べるように、以前は寺門の右にこの碑文があった。「房山雲居寺研究」ではこの碑文が記載されており、少なくとも塚本氏等が雲居寺を訪れたときにはまだ現存していたものと思われる。その他、この保管庫には、遼代の石經刻石の經緯を著した重要な「千人邑会之碑」を残している。この石碑が建てられた経緯については「房山県志」に

協力唱和、結一千人之社、一千人之心、春不妨耕、秋不麋獲。立其信、導其教、無貧富後先、無貴賤老少、施有定例、納有常期。貯於庫司、補茲寺傷欠。

と述べるように、当時の寺院経済がどのような状態にあったかを示す貴重な文化的資料となるであろう。

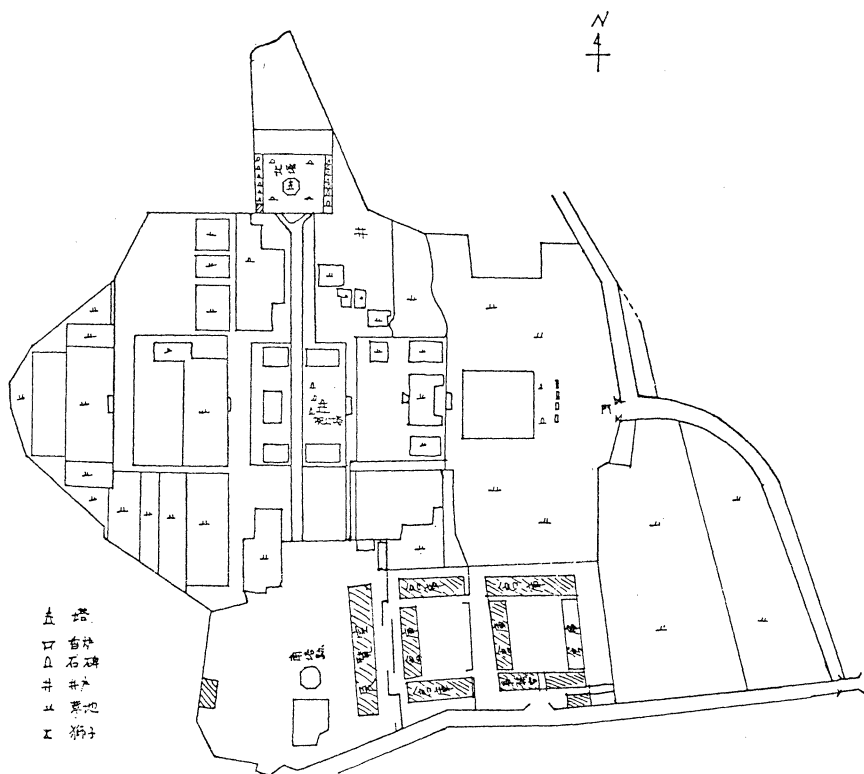
保管庫に収蔵されている文物の他に現存するものとしては、房山石經の発願者、静琬の墓である「琬公塔」、「三公墓」がある。現在は旧雲居寺境内にあるが「幾輔仙釈志」に自隋大業迄唐貞觀、大涅槃經成。是夜山吼生香樹三十余本。……因構雲居寺。今香樹林後琬公塔存焉。

と述べるように、以前は雲居寺境内の外に在ったことがわかる。「房山雲居寺研究」でも三公塔の北に香樹庵と呼ばれる庵があり、その北に「琬公塔」があったと記しているところからみても、以前は境内の外にあったことがわかる。又、解放以後の発掘調査によってこの琬公塔の下から静琬のものと思われる石棺が出土し、現在雲居寺文物管理局の展示室に収められている。

解放以後、中国側では、文物管理局、仏教協会が中心となつて整理、研究にあたっているが、その整理中に発見されたのが上述した「梵本般若心經」等の經典である。梵本般若心經はサンスクリット語からの漢字を使った音訳本であり、不空訳の梵本般若心經は敦煌本から発見されている。しかしスタイン本を見る限り、その文字にはかなりの異同がありまた房山石經から発見された「慈賢訳梵本般若心經」は、未発見のものである。これらの資料は、音韻学や、契丹版を含めた版本史の研究に欠かせないものとなる。

以前、文物管理局と仏教協会が共同で「房山雲居寺石經」

房山雲居寺について（石橋）



を出版した。しかしこの本は雲居寺石經の一部であり、房山雲居寺の全容を速やかに出版されることを期待するものである。

- 1 文物 一九八二年第六期参照。
- 2 東方学報、京都第五冊副刊「房山雲居寺研究」。
- 3 支那仏教史跡踏査記 常盤大定著 一一〇頁。
- 4 東方学報、「房山雲居寺研究」四二七頁。

（付記）この報告は、浄土宗宗務庁、及び中国教育部から頂いた奨学金による中国留学中に得た資料に依るものである。ここに深厚なる謝意を表すものである。

（仏教大学非常勤講師）